ART KISS LETTER

[アート・キッスレター]

vol.48

FREE

SUMMER [2010.夏号]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum,Kumamoto
熊本市現代美術館発行　http://www.camk.or.jp

相馬浩一（制作）・宮島達男（プログラム）《Floating Time（時の浮遊）海と魚たち》

巻頭言

水泳の達人・小泉八雲

熊本市現代美術館館長　桜井武

小泉八雲の同時代人と現代作家の作品による「へるんさんの秘めごと」展は、人間の根源を見つめる自由人・小泉八雲の深く広がりのある世界とつながっている。青年時代から壮年期にかけての２０年を過ごしたアメリカで、ラフカディオ・ハーン（八雲）はジャーナリストであり、アメリカ文学史に残る物語作者であった。そして訪れた日本でも八雲はジャーナリスト精神旺盛に、祭りや事件や地方の行事を取材のため走り続けた。そしてこの日本で彼は、深く豊かな文化の鉱脈を発見したのであった。八雲はあらゆるものに興味を抱いたが、水泳の達人でもあった。それを証明するのは駿河湾に面する焼津である。彼は気に入る海を探していた。東京から焼津まではいくつもの風光明媚な海辺の街があるのに、海にこだわった八雲がなぜ焼津を選んだのか。八雲にとって、この海こそわずか２歳までではあったが、無意識の底に刻まれた故郷地中海海域のイオニア海を思わせるのであったと想像できる。焼津の海岸は石ころだらけであり、海は急激に深まる。潮の流れがあり、素人はここでは泳がないが、ある８月のお盆の夜、彼は沖に流された灯ろうを求めて一人で泳ぎ出す。よほど泳ぎに自信がないとこれはできない。暗闇に揺れる灯ろうを見つけ、八雲が岸に戻ると、滞在先の魚屋の山口音吉が心配して待っている。音吉はお盆の夜には泳いではいけないと諭すが、八雲にとってそれは日本の精霊に出会う、闇夜の貴重な遊泳であった。奇妙な神々や精霊がいっぱい宿っていた日本を、八雲は西欧流の鋭い視点で探求し、限りなく深い愛情を注ぐことによって、人生の最後の地としたのである。

熊本市現代美術館のさいきんの活動
MUSEUM INFOMATION

「へるんさんの秘めごと」展関連イベント
出品作家によるアーティスト・トーク
2010.6.26

「へるんさんの秘めごと」出品作家である野村佐紀子さん、西尾康之さん、秀島由己男さん、亀井徹さん、松井冬子さん、鈴木淳さんに、各出品作品の前でアーティストトークを行っていただきました。話のなかで、野村さんは幼少期に故郷の下関で夜見た景色について触れ、西尾さんは中学時代に溺れた体験やスマトラ沖での地震による津波の大災害で受けたショックなどを作品に込めたとお話してくださいました。秀島由己男さんは、今回の新作は、幼少期に父親から聞いた物語と記憶をそのまま「安産で」生み出したような気分ですと語り、松井冬子さんは、東海大学阿蘇校舎での子牛の解剖の記憶と、完成した新作への深い愛着について語っていました。あっという間の２時間でしたが、八雲をテーマにした展覧会への出品にあたり、作家本人も八雲と自分の関係性について深く思考された様子が浮かび上がってくるアーティストトークとなりました。(H.T)

【参加人数：60 人】

祝祭と祈りのテキスタイル展関連イベント
ダンス・パフォーマンス「ヴォカリーズ・テキスタイル」
2010.5.1

AIR-MAN 宇佐美陽一（オイリュトミー）、ヨー・コージ（音楽）によるダンス・パフォーマンス「ヴォカリーズ・テキスタイル」が開催されました。
ホームギャラリー内に円形に並んだ椅子とスポットライトが作り出す、いつもと一味違う舞台のような空間の中でパフォーマンスが始まりました。まずは、会場にあった椅子を使用して即興でのパフォーマンス、その後「歌としての織物」と題したレクチャーが行われました。休憩を挟んで、最後に「テキスタイル」をテーマに、オイリュトミーによるパフォーマンスがおこなわれ、閉幕。エメラルドグリーンの絹の衣装に身を包み、空気の流れを感じる滑らかな動きと、心に響くサクソフォンの音色に観客の皆さんが息を呑み引きこまれる姿が印象的でした。(S.Y)

【参加人数：40 人】

第２回　ひびのこづえワークショップ「虫をつくろう」
2010.5.4-5.5

晴天に恵まれたゴールデン・ウィークにひびのこづえワークショップ「虫をつくろう」が開催されました！２日間で計３回行われたこのワークショップには、100 人を越える方にご参加いただき、大盛況のワークショップとなりました。同ワークショップは、３月末にも本展プレイベントとして開催されており、この時制作された「虫」は会場内の森の風景の緞帳に展示されています。その「虫」を見学したり、資料を見ながら、参加者は舞台衣装のハギレを使ってそれぞれ自分だけの虫を作り上げていきました。完成後は、出来た作品から順に展覧会場に展示され、自分の作った「虫」を探す参加者の姿も見られました。緞帳にとまった 300 匹を越える個性あふれる「虫」たちのおかげで、会場内は一気に賑やかさが増し、まさにハレを感じる楽しい空間となりました。(S.Y)

【参加人数：150 人】

プレママ＆ファミリーツアー
2010.5.22

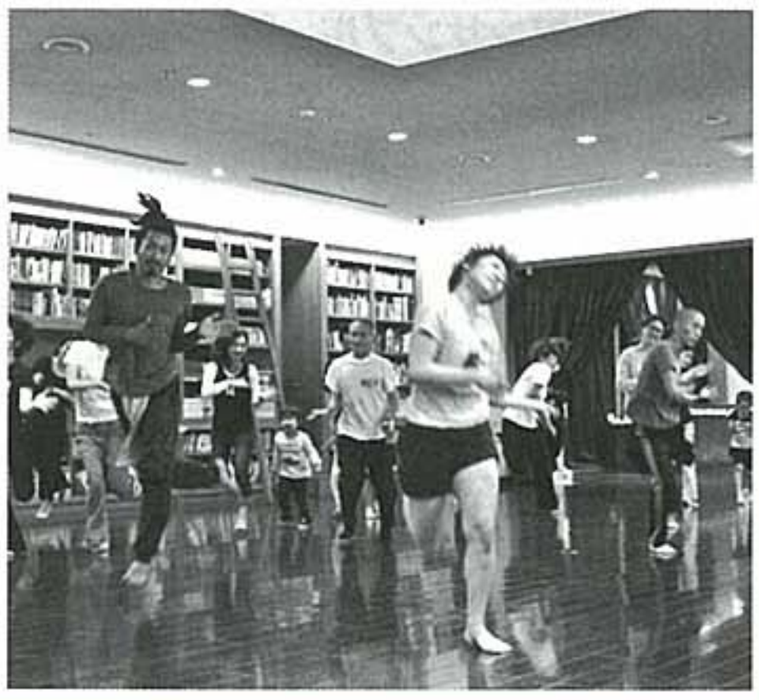
「祝祭と祈りのテキスタイル」展のファミリーツアーを行いました。今回のツアーは、はじめて参加したお友達と一緒に、お母様、おばあ様の姿も。思わぬ３世代の鑑賞ツアーとなりました。特にひびのこづえコーナーでは、「ＮＨＫの『にほんごであそぼ』を毎日見てます」という声もあがり、ひびのこづえさんの多面的な世界にひきつけられたようでした。どうぞ、今度はおじい様も誘って、美術館にいらしてくださいね。(A.S)

【参加人数：７人】

プロジェクト大山　ダンス　パ　ホーマン　ス　～悶絶　凱旋 Ver.～

2010.5.30

熊本市出身の振付家／パフォーマー、古家優里率いる女性 5 人組のパフォーマンスグループ「プロジェクト大山」の皆さんによるダンスワークショップ＆パフォーマンスが開催されました。
午前中に行われたワークショップ「あなたの悶絶いただきます」には、3 歳から 67 歳の方まで幅広い年齢の方にご参加いただきました。まずはストレッチ運動で体がほぐれたところで、ユニークな掛け声に合わせてダンスの動きを一つずつ覚えていきました。8 カウントの間自由に「駄々をこねる」など、タイトル通り日頃の悶悶 (もんもん) を晴らす動きが取りいれられた愉快なダンスに、参加者がいきいきと取り組んでいる姿が印象的でした。飛び入り参加の方も含め、最後に行った 30 人を越える全員でのダンスはまさに壮観。笑顔の絶えない大満足のワークショップとなりました。
午後は「ダンス　パ　ホーマン　ス　～悶絶　凱旋 Ver.～」として、ダンスパフォーマンス公演が開催されました。音楽の始まりとともに、青い衣装に真っ赤な靴下がキュートな出で立ちで現れた 5 人が踊るユニークで可愛らしいダンスに、観客の皆さんも一気にプロジェクト大山の世界に引き込まれたようでした。日常の何気ない動作が取り入れられた振付はもちろん、衣装の早替えや音楽の変化など細部まで綿密に組み立てられたプログラムに時間はあっという間に過ぎ去り、満場の拍手の中、幕を閉じました。(S.Y)



【参加人数：ワークショップ /30 人・パフォーマンス /40 人】

記念講演会「漁民と色」

2010.6.13

展覧会最終日、山下義満さんによる記念講演会「漁民と色」が開催されました。山下さんは本展に出品されているドンザや大漁旗などの天草・牛深地方の漁具のコレクターで、熊本の漁撈文化の研究家でもあります。今回の講演会では、「漁民と色」というテーマで、牛深地方の漁師への聞き取りや、その生活についてお話しいただきました。現在は失われてしまった漁民の暮らしについてのお話しは感慨深く、時に冗談を交えながら語られる体験に基づいたエピソードに、笑顔の絶えない講演会となりました。(S.Y)

【参加人数：90 人】

鈴木淳公開制作
（「嫌よ嫌よも好きのうち」、「ちにあしがつかず」）開催しました！

2010.5.1-5.2

5 月 1 日（土）と 2 日（日）の両日、「へるんさんの秘めごと」展出品作家・鈴木淳さんの公開制作が熊本市現代美術館エントランスで行われました。参加者の皆さんに「首を 3 通りのテンポで振る」、「ジャンプを数回する」という二つの動作をしていただき、鈴木さんが撮影。参加して頂いた方はなんと 130 人！美術館にちょっと遊びに来ただけの人も巻き込んだ今回の公開制作。快く参加をご了承していただいた皆様、本当にありがとうございました。「思ったより難しかった」、「いつも使わないところを使ったような気がする」、「(自分の映像が) 作品になるのがちょっと想像つかないのでどうなるか楽しみ」などなど色々な感想がでました。今回、撮影した映像をもとに「へるんさんの秘めごと」展出品作品「嫌よ嫌よも好きのうち」、「ちにあしがつかず」が制作されました。どのような作品が出来上がったかは見てのお楽しみ。どうぞ会場でお確かめください。(M.F)

【参加人数：130 人】

明後日朝顔プロジェクト 2010

2010.5.8-5.9&6.13

水戸で全国会議が行われました。

今年も水戸芸術館で「明後日朝顔プロジェクト全国会議」が行われ、全国各地から集まったスタッフと交流を深めました。昨年の活動報告会の後は、苗植え式と地域の方も交えたウッドデッキペインティングのワークショップを開催。当館の苗も全国の参加地域から持ち寄った苗と共に、太陽の光がいっぱいにそそがれるウッドデッキに植えられました。一面に緑のカーテンが出来る日が待ち遠しいです。(Y.M)

宇宙朝顔の種を植えました。

日本宇宙少年団（YAC（Young Astronauts Club-Japan）：本部長 松本零士さん）が『明後日朝顔プロジェクト』と連携・協力し、YAC 副団長・宇宙飛行士の山崎直子さんが搭乗したスペースシャトルのミッションの YAC 公式飛行記念品（OFK：Official Flight Kit）として明後日朝顔の種が宇宙を旅してきました！そして、その中から貴重な 5 粒を当館も頂くことができ、種植え式を行いました。はたしてどんな花を咲かせるのでしょうか。成長が楽しみです。(Y.M)

ミュージック・ウェーブ　No.032&No.033&No.034　2010.5.15&5.24&6.24

ライアーアンサンブル　「菜のはな」

ライアーアンサンブル「菜のはな」の皆さんによるコンサートを開催しました。ライアーとはドイツ語で竪琴のことを指します。心と体を癒す楽器としてさまざまな教育や治療の現場で取り入れられているそうです。今回は、イギリス、アイルランドの民謡から映画「千と千尋の神隠し」の主題歌まで幅広い曲を演奏していただきました。オルゴールのように響く、優しい音色に心がほぐされるような、素敵なひとときとなりました。(A.A)

【参加人数：60 人】

～和の音色～邦楽コンサート

5 月 16 日に開催される第 16 回くまもと全国邦楽コンクールを記念して、熊本琴演奏者協会の皆さんによる「～和の音色～邦楽コンサート」が行われました。季節にあわせた滝廉太郎の「花」や、現代の軽やかな曲など 8 曲が演奏され、来場者の皆さんも新鮮な調べを楽しんでいました。(A.A)

【参加人数：60 人】

八弦工房　マンドリン四重奏

熊本のマンドリン愛好家によって結成された八絃工房のみなさんによるマンドリン四重奏をお贈りしました。マンドリンの歴史や、楽器の種類など興味深いお話を交えながら、カルテットの美しいハーモニーが会場を魅了し、心地よいひとときとなりました。(M.O)

【参加人数：75 人】

第 6 回お話し玉手箱ライブ開催　2010.5.2

RKK アナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんによる文学作品の朗読会。第 6 回の演目は、葉祥明「母親というものは」、熊本の昔話「ねこ岳のはなし」、芥川龍之介「杜子春」でした。ピアノの生伴奏をバックに柔らかに読み上げられる「母親というものは」。母親への思いのつまった詩を聴いて、自分の母への思いを見つめなおした方も多かったようです。打って変わって軽妙な語り口と阿蘇の山それぞれの性格が伝わってくるような声色による演技に引き込まれる「ねこ岳のはなし」が会場を盛り上げます。そして、中国の古典に範をとった芥川の名作「杜子春」。端整な文章が端整な声、端整な語りによって読み上げられ、物語が綴られました。(M.F)

【参加人数：80 人】

CAMK 「読みがたり」　2010.5.15,6.19

第 9 回 2010.5.15

テーマは「自然とあそぼ」。ゾウのなが～いお鼻が実物大で見られるビックブックや、ユニークな絵が子どもに大人気の「こびとづかん」の絵本が活躍しました。(C.T)

【参加人数：25 人】

第 10 回 2010.6.19

「雨やどり」のテーマに沿って、今回はカサで飾りつけをした舞台でみなさんをお出迎えしました。絵本と紙芝居の他にも、子どもをお母さんお父さんのお膝の上に乗せて遊んだり、手遊び歌の「かえるのうた」では二手に分かれて輪唱したりと、親子参加で盛り上がる会となりました。(C.T)

【参加人数：20 人】

第 78&79 回　詩の朗読会

2010.5.27&6.24

第 78 回　5 月の詩の朗読会、テーマは「祭り」でした。12 名の方が詩作を発表されました。
当館で開催中の「祝祭と祈りのテキスタイル」展に合わせ、「祭り」をテーマにした詩が披露されました。中でも、「しゅる、しゅら、しゅる」と衣擦れの音をイメージされたような言葉の響きが印象的でした。

【参加人数：5 月 17 人】

第 79 回　6 月の詩の朗読会、テーマは「名前」でした。9 名の方が詩作を発表されました。
なぞなぞから始まったり、すべての物に名前があるという不思議さに焦点を当てたり、SF 仕立ての詩があったりと、いつもよりコミカルな詩が多かったように感じました。(EZ)

【参加人数：6 月 14 人】

MATCH FLAG PROJECT 2010 SOUTH AFRICA in KUMAMOTO

4 月 28 日のくまもと城下まつりにあわせて開催した MATCH FLAG、アーティストで JFA 広報委員、日比野克彦のアートプロジェクトです。

フラッグ贈呈式
2010.5.28

6 月 11 日から南アフリカで開催されるサッカーワールドカップの、カメルーン × 日本、オランダ × 日本、デンマーク × 日本戦を応援するフラッグを上通、下通、新市街商店街の皆さんを中心に作成し、5 月末まで各商店街に展示しました。 贈呈式当日は、いよいよ応援のために現地へ向かう日比野さんに向けて、下通『メガネは長江』店長で、マッチフラッグ熊本協議会会長の長江浩司さんより激励の言葉があり、各商店街の代表者から日比野さんへフラッグが手渡されました。1 年前、日比野さんから商店街の皆さんへの呼びかけによって、熊本で始まり全国に広がって、今回は国内 11 ヶ所の他、南アフリカでも開催された MATCH FLAG PROJECT。 日本は決勝トーナメント一回戦で惜しくも敗れましたが、予選リーグで日本中を湧かせてくれたサムライジャパン。全国で作られた MATCH FLAG が、死闘を繰り広げるサムライジャパンの後ろで大きく旗めく様子が放映されていました。(C.I)

【参加人数：30 人】

G3 vol.71　山鹿灯籠展ー生きた和紙のかたちー

2010.6.2-7.25

「山鹿灯籠ー生きた和紙のかたちー」展は、熊本県山鹿市に伝わる伝統工芸の山鹿灯籠のなかから、宮造りの法隆寺を紹介しました。個人収集家の木下康氏が熊本の紙工芸の保存と継承を願い、山鹿灯籠師の中島清氏へ依頼し数年をかけて制作された、法隆寺の中門、金堂、五重塔、本堂、経蔵、夢殿、鐘楼の 7 つの建造物です。およそ 1/30 のスケールでありながら、細部に至るまで精巧に作られ、糊しろなしの接合など、さまざまな伝統の技をじっくりと堪能することができました。
あわせて、2007 年に当館で開催された日比野克彦展の際にアーティスト日比野克彦氏のデザインを基に、中島清氏が制作されたフロアランプ「トーロート」も 6 点展示しました。
受け継がれてきた山鹿灯籠と、現代のアーティストとの共同プロジェクトの作品を通して、伝統と現代の感性が融合した紙工芸の多様なかたちの表現を伝える機会となりました。(Y.H)

加藤笑平パフォーマンス「あなたのゴミをください」

2010.6.19&7.3

7 月 31 日よりギャラリーⅢで開催される、熊本ゆかりの若手アーティスト 5 組の展覧会「熊本アーティスト・インデックス」に出品する、加藤笑平さんが美術館エントランスと上通でパフォーマンスを行いました。
『あなたのゴミをください』は、アーティストの加藤笑平が様々な格好に扮し、道行く通行人から「ゴミ」をいただくパフォーマンスです。天草で独特の暮らしを営む加藤が、「ゴミ」を介在として、熊本の人と「出会う」ことによって新たなコミュニケーションを誘発し、そこで得た物理的な「ゴミ」と「体験」とを、最終的に平面の絵画作品へと昇華させるものです。ボロキレをまとった衣装で 'ゴミを乞う' パフォーマンスと、サラリーマンのようないでたちでゴミについてのアンケートをとる姿に、遠巻きに見ていた人も、興味深々の様子。これらの結果は、ギャラリーⅢでの展覧会で作品として発表されます。(A.S)

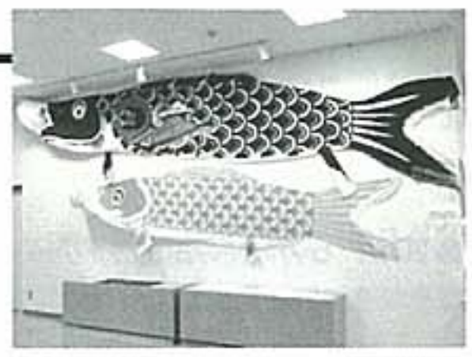
【参加人数：6 月 /20 人・7 月 /100 人】

ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう？」の意です

元気な子供への期待ー武者飾りと鯉のいろいろ展ー

2010.5.1－27　益城病院美術ギャラリー
益城町惣領 1530　TEL：286-3611



地域への文化貢献や文化発信の思いを込め、平成 17 年から病院内のギャラリーで展覧会を行っている益城病院で開催されていたのは、この時期にぴったりな鯉のいろいろ展。縁起のよさとその品のある姿が昔から好まれていた鯉をモチーフにした、有田焼の大皿や子供の晴れ着などが展示されていた。中でも5m はあろうかと思われる昭和初期の鯉幟は圧巻で、子供の成長を願う心が表れていた。(E.Z)

木工と漆と日本画　戸田東蔭・純一・友行 親子三人展

2010.6.2－8　鶴屋百貨店 8 階美術ギャラリー
熊本市手取本町 6 番 1 号

熊本の木工工芸家 戸田東蔭さん、その息子で同じく木工工芸家の純一さん、漆工芸家の友行さんの三人展。東陰さんの作品は、指物の技術が遺憾なく発揮された螺鈿の装飾が美しい木箱や古民具を材料として作られた花台など、バラエティに富んだ作品が出品され、既存の枠にとらわれない豊かな発想力が感じられた。また、同じ木工である純一さんの作品は、滑らかに光を放つ器の曲線が美しく、シンプルながら手に取った時の柔らかな手触りを想起させるものであった。一般にイメージされる黒や暖色の漆とは異なり、ベージュや深い青緑などの色味が新鮮な友行さんの作品は、自身で創作しているという文様の繊細さが印象的であった。会場を訪れた人々は、並べられた三人三様の個性と挑戦が光る作品たちをゆっくりと楽しんでいた。(S.Y)

第 21 回　国際文化交流会「女流茶掛け・屏風展」

2010.6.8—6.13　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町 2-18　TEL:096-351-8411

県下の書道界で派閥を越えて各社中から推薦された女流書家 73 人の作品展である。今年は掛け軸 71 点に屏風 2 点となった。漢字･かな･調和体書等である。前衛的な書、活発な作品ではなく、伝統的な和室にあうような書になっていた。賞を決めるコンクール形式の書展ではないので、各自の想いや格言など、自分の好きな歌や言葉が見られた。又ユニークな表装もあり、落ちついた楽しい会場となっていた。(S.K)

樋口友香個展　あたしたたるい展

2010.6.11－20　GALLERY ADO
熊本市河原町 2　096-352-1930

会場には、大きな瞳の少女と、その内なる世界がファンタジックに描かれた作品が並ぶ。その瞳は過去に憧れた姿や将来への希望が内包され、少女の回りに配置されるぬいぐるみなどのモチーフは、大人の女性にステップアップする時に生じる様々な問題や不安が表されている。現在大学生である樋口さんが自身と向き合い今後どのように変化していくのか、将来が楽しみな展覧会であった。(M.O)

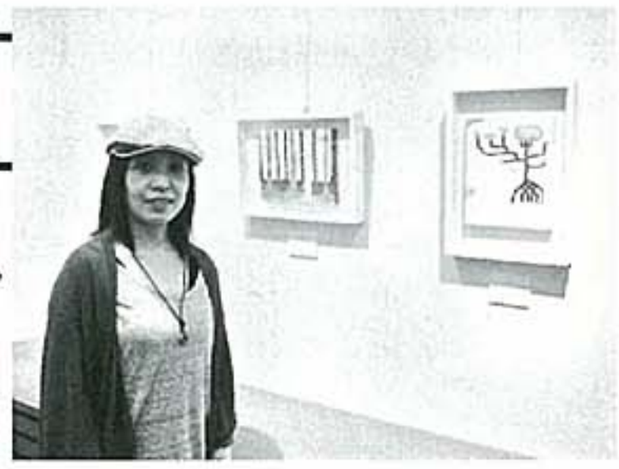
伊藤恵美子　象眼展

2010.6.15－20　ギャラリーカフェアーク
熊本市上通町 5-46 上通りイーストンビル 3F

もともとアクセサリーを作っていた伊藤恵美子さんは、自分にしか出来ないことは何だろうと考えていた時分、伝統工芸館で象眼と出会う。象眼師である白木光虎氏、良明氏に師事し、その後のスペイン留学で、より自分らしい象眼の技術を身に付けたという。4 回目となる今回の個展では、タイピンやペンダントトップのアクセサリーから小物入れなど 50 点を展示販売していた。細工模様は、花や羽ばたいている鳥のモチーフ。また、インスタレーションを大事に作りながら決めていくという、円や楕円を羅列する花火のようなモチーフが目立った。老若男女問わず自分好みの 1 点が見つけられるデザインが魅力的だ。「作りたいものがありすぎて追いつかないんです」と話す作家の言葉を聞いて、作品が一層輝いて見えた。(C.T)

空想図鑑 2　コーダ・ヨーコ展

2010.6.19－7.4　COLLECTION OMO
上通町 4-14　大森ビル 3F　TEL：356-4721



2008 年の空想図鑑に続き 2 回目。タイトルの理由を訊ねると、シリーズ化してゆくゆくは図鑑のようにまとめたいという気持ちと、1 枚でもストーリーがあり、自由に空想を広げて欲しかったから絵本ではなく図鑑にしたとのこと。確かにピンクの犬やちょうちょになったおおかみなど、キャラクターの存在そのものがユニークでそれだけで楽しい空想をどこまででも広げられる作品になっていた。個人的には、絵本という決められた空間の中で広がり続けるコーダ・ヨーコの空想の世界を観てみたいと思った。(E.Z)。

Suitottō Kumamoto

CAMKフレンドインタビュー　＊今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。

［スイトット・クマモト］

GALLERY ADO オーナー、河原町文化開発研究所副所長　黒田恵子さん

河原町のこれまでの歩みについて教えてください―

2003 年から始まった河原町のアートプロジェクトに賛同したのを機に、ここ河原町にカフェ＆ギャラリー GALLERY ADO をオープンしました。これまで様々なものづくりのイベントやワークショップを行ってきましたが、地域主体で定期的に運営していくことの難しさ、意見の相違等、自分の河原町に対する想いとは裏腹に上手くいかないこともありました。そんな中、試行錯誤して生まれたのが「河原町アートの日」。毎月第 2 日曜日に、ジャンルを問わず表現活動をしたい人が作品を発表できる場所を提供する企画を立ち上げました。最初の頃は、出品者が 3、4 人くらいで閑散としたものでしたが、回数を重ねるごとに少しずつ輪が広がり、4 年目を迎える現在は毎月 20 名近くの出品者が各々の作品を展示・販売を行っています。また、年に一度のアートの日の集大成である「河原町アワード」では、様々な業界の方を審査員としてお招きし盛大に行いました。河原町といろんな人が繋がって今後ますます盛り上がっていくことを願っています。

河原町が今後目指すものと美術館とやってみたいことは―

夢は大きく！ということで河原町から世界へ羽ばたくアーティストを出す事です。例えばどこかの国のお金持ちのバイヤーが自家用ジェット機でこの熊本の河原町にはるばる買付けにくるとか。（笑）世界中から人が集まる場所になればと夢を膨らませています。
美術館とやってみたいことは、今、実際に現実になりつつあります。アートの日参加者の竹之下亮さんが、2008 年に日比野克彦さんをお迎えして開催した「河原町文化大爆発」で河原町アート大賞を、そして昨年開催した「河原町アワード 2009」で CAMK 賞を連続受賞し、ギャラリーⅢのグループ展「熊本アーティスト・インデックス」に参加することになりました。今後も河原町でがんばるアーティストの卵が美術館とどんどん関わりをもって、共に歩んでいけたら嬉しいです。

［来館者のみなさんからのメッセージ］

アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介いたします。

祝祭と祈りのテキスタイル展

●当時の生きていた人達の生活感や時代が感じられて楽しかった。現代のテキスタイルは驚きの一言でした。（熊本市内、20 代、女性）

●船を置いたり、大きな幟を斜めにかけたりと、空間に動きがあっておもしろかった。（熊本県内、20 代、男性）

●古布を使って物づくりをしている者として見せていただいて、目を見張る想いがしました。アートの豊かさを満喫しました。（熊本市、60 代、女性）

●大漁旗を見に来ました。昔の牛深が思い出されます。人々の漁に対する想いが、120 枚も集まると迫って来るように感じられました。（熊本県内、30 代、女性）

編集後記

編集長の冨澤のピンチヒッターとして、初めて AKL の編集に携わりました。ほんの数ヶ月の間に、小さなものから大きなものまでいろんな企画をやっているんだなぁと改めて実感。やって終わりではなく、きちんと形に残して次につなげる大切さを、編集することで経験させていただきました。これは日々の自分にも当てはまると思い、日記をつけることに。さて、いつまで続くかしら？

初担当：蔵座江美

夏真っ盛りです。日比野さんによる「明後日朝顔プロジェクト」の朝顔さん達も蔓を伸ばして、すくすくと育ち、キッズサロンの景色に彩りを添えています。現在開催中の「へるんさんの秘めごと」展は夏にぴったりの展覧会です。夏の暑さを涼む、幻想的で涼やかな作品が皆さんをお待ちしております！CAMKで素敵な夏のひと時をお過ごしください。

初担当：芦田彩葵

●発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.48　2010年8月発行（夏号）　◎無料◎
●発行人／桜井　武　編集／蔵座江美、芦田彩葵
●デザイン／（有）松永　壮デザイン事務所　●印刷／シモダ印刷
●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧
＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro（書道家）
森山淡草
Tanso Moriyama（書道家）
岩崎千夏
Chika Iwasaki（熊本市現代美術館事務局次長）
本田代志子
Yoshiko Honda（熊本市現代美術館主任学芸員）
蔵座江美
Emi Zoza（熊本市現代美術館学芸員）
冨澤治子
Haruko Tomisawa（熊本市現代美術館学芸員）
坂本顕子
Akiko Sakamoto（熊本市現代美術館学芸員）
芦田彩葵
Aki Ashida（熊本市現代美術館学芸員）
矢加部咲
Saki Yakabe（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
大岩みゆき
Miyuki Oiwa（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
藤本真帆
Maho Fujimoto（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
高橋知江
Chie Takahashi（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
村上由起
Yuki Murakami（熊本市現代美術館総務アシスタント）

WORLD NEWS

英国の文化機関、ブリティッシュ・カウンシル主催の「日英キュレーター交流プロジェクト」に、2010 年 5 月 9 日～ 19 日まで、参加させていただく機会を得た。その際にブリティッシュ・カウンシルのブログ（http://www.connected-uk.org/jpncurators/）にアップした滞在記を下記に転載する。

このたびの研修を、私は現代のイギリス美術における「教育」というやや違った角度から眺めながら、10 日間を過ごした。ブリティッシュ・カウンシルによってアレンジされた訪問先は、テート・ブリテンのような大美術館から、先鋭的なホワイトチャペル、バルチック・コンテンポラリー、小規模ながら質の高い企画を行うチセンヘール、そして、ホワイトキューブに代表される商業ギャラリー、また、地域もロンドンに限らず、グラスゴー、ニューカッスル、ノッティンガムと地方都市にわたり、幅広く目配りのきいた選択がなされていた。最終的には、オフィシャルなものだけでも 18 ヶ所、個人的に立ち寄った分も含めると、実に 30 ヶ所以上をまわった結果となり、管見ではあるが、現代のイギリス美術における一定のパースペクティブを得る事ができたように思う。

それらを通覧して感じたのは、イギリスの美術館における教育活動が非常に「戦略的」に行われていた、ということだ。それは、基本的に美術館が入場無料で、国家／地域の政府をはじめとする複数の機関からの助成が、活動資金源となる文化政策にも大きく関わっている。世界中から観光客が押し寄せるテートは別格としても、いわゆる観光客の来ないオルタナティヴ・スペースに対しても継続して助成が行われている点に、「教育」という目に見えない未来の「富」に対して積極的に資金を提供するイギリスという国の懐の深さを感じた（そのディレクションのあり方、作品のクオリティ、プログラムの内容に関して、厳しく審査する必要があるように感じたが）。他方で、オープンスタジオやアーティストトーク、ワークショップ、ティーチャーズ・デーなど、地域に対する教育活動は、それらの館やスペースが活動を継続していく生命線となり、日本よりもはるかに切実に、そして館の活動の重要な柱として位置づけられている。

公立美術館中心で、その資金をほぼ 100%ひとつの自治体の税金によってまかなうことが多く、学芸員の分業化が少ない日本では、「美術文化の振興」「地域おこし」「観光」「入場者数／収益」「教育」が非常に複合的にあいまいに行われている。もちろん、日本ならではのきめの細やかな運営やプログラムの質の高さなど、誇れる点も多数ある。しかし、今一度、そのミッションとは何なのか、自分たちの活動を見直し、うまく「強調して」伝える、とりわけ、指定管理者制度下にある美術館においては、教育活動をひとつの「武器」として行政にアピールする重要性を改めて思い知った。

それらのイギリスの美術の層の厚さに圧倒される中、ふと思い立ち、ツアーの合間にロンドン漱石記念館という小さな博物館を訪ねた。よく知られるように、漱石は当時の勤務先である五高（現在の熊本大学）から、熊本に妻子を残したまま、約 2 年の歳月をこのロンドンで過ごした。今から 110 年前のことである。イギリスになじめず引きこもり、侘しい暮らしの中で書籍を買い集め、その後、日本に戻って数々の傑作を残した漱石。その空気の一端を感じとってみたくなり、熊本在住の大学教授が私財を投じて、当時の漱石の下宿の向かいのアパートの 1 室を買いとった、ガイドブックにも載っていない、この小さな空間に足を運んだのだ。そこには、シンプルな中にアール・ヌーヴォー調の装飾を施した、漱石こだわりの装丁による著作が並んでいた。漱石は、引きこもり生活の中でも、テートやダリッジ・ミュージアムに足を運び、当時のいわば最先端の「現代美術」であったターナーや、ラファエル前派などにもよく親しんだ。その後の、『三四郎』『草枕』をはじめとする代表作にも、イギリスでその一端をつちかったであろう美術的な描写がちりばめられている。

そのように、いわば当時のイギリス美術の紹介者であった漱石だが、自身の専門である英文学について、外国人である自分がそれを語ることの是非について、深い苦悩の中にいた。しかし、そこで漱石は「自己本位」という考え方に至る。その考え方とは、自己が主にして、他者は賓、つまり、他国の文化についてよく学ぶが、最終的には自分自身の考えがなくては、それは何のためにもならない、ということである。

果たして、日本の美術館は、漱石が約 100 年前に身を削るようにして到達した「自己本位」に少しは近づけているだろうか。帰国した漱石が、教師の職を辞して、自らの考えを「小説」というかたちで残し、それが今もなお日本で愛読されているように、このイギリスで得た私の体験が、100 年後の日本の美術館の活動の中に、ささやかでも息づくような仕事を残していければと願う。(A.S)

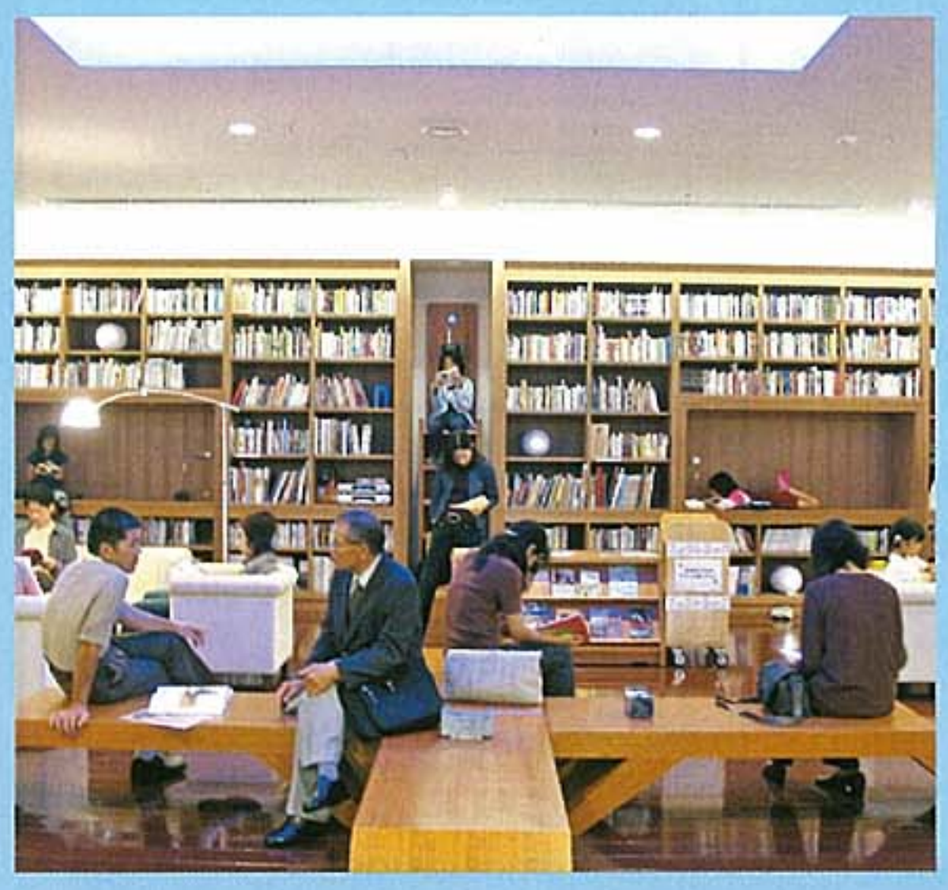
A テート・モダン 世界のオルタナティブ・アートスペースが集うお祭りで館内は大賑わい

B 向かいの公園にはマーク・クインの新作が

C White Cube ロンドンのアートシーンを牽引する存在

D グラスゴーの The Modernn Institute ジム・ランビーの展示

E 倫敦漱石記念館の内部



ホームギャラリーからのお便り vol.2
LETTER FROM HOMEGALLERY

ユニークな本棚

前回、「ホームギャラリーの空間そのものが作品でもあるんです。」とお話しました。今回は実際に本棚として使用しているマリーナ・アブラモヴィッチの作品《Library for Human use》をご紹介しましょう。なんと言ってもユニークなのは、棚に挟まれた 3 つの椅子と書架の中央にある 2 つのベッドでしょう。実際に椅子に座ったり、ベッドに横になって本を読むことができます。これは彼女が小さい頃、収納棚に隠れて本を読んでいた経験が元になっています。確かにちょっと狭くて暗い場所ってなんだかほっとするし、集中できますよね。土日ともなると、何も説明していないのに、子どもたちが椅子に座ったり、ベッドに横になったりして（しかもちゃんと靴を脱いで！）思い思いに本を読んでいます。そんな姿を見かけると、彼女に見せてあげたいな～と思います。もちろんこの場所は子どもたちだけでなく大人にも楽しんで欲しい場所なので、恥ずかしがらずにぜひ座ったり、横になってみてください。きっと小さい頃のことを思い出して、美術館にいることを忘れてしまうことでしょう。本棚でそんな体験をすることができるなんて素敵だと思いませんか？(E.Z)